

C-26 縫代長に関する研究(オ2報)

東海学園女短大 ○辻 啓子 伊藤きよ子 西條セツ 西村正代

目的 洋服を構成する場合、袖つけのように力のかかる部分では、縫目がほつれたり、布が破れたり、縫糸による目引きを起す。織物の種類も多くなり、縫製方法や縫代のしまつの方法、さらに縫目強さに関する研究も多くなされている。しかし縫代長と縫目強さの関係についての研究は比較的少く、経験的に行われていることが多い。オ1報では、素材別に縫代長と縫目強さの関係についてたて方向を検討した。今回は縫目方向5種について比較検討し、縫代長と適当なしまつの方法を見いだすべく研究を行った。

方法 試料布はブラウス地として用いられている綿平織、綿サテン、ポリエステル平織、ポリエステルクレープの4種。縫糸は綿カタン糸ソフト仕上げ60'S/3、テトロン糸60'S/3の2種。縫代は0.4、0.6、0.8、1.0cmの4種。縫目方向はたて、よこ、30°、45°、60°の5種。家庭用ミシンで縫製後24時間放置し、島津式オートグラフS100により引張試験を行い、引張抵抗線図ならびに破断状態を検討した。

結果 1. 縫代長と縫目強度の関係は、綿サテンよこ、ポリエステル平織のたて、よこ方向では、縫代長が多くなると引張強度が大になる傾向がみられた。しかし30°、45°、60°ではいおれの試料布においてもその傾向はみられなかった。2. 30°、45°、60°ではたて、よこ方向に比し、また綿糸よりテトロン糸で縫製したほうが強度は大なる傾向がみられた。3. 綿サテン、ポリエステル平織のたて、よこ方向は滑脱現象が顕著であるが、30°、45°、60°方向はその現象が少く、織糸切断がみられた。